

5541・5415 進行



【コード進行の型 C003】ブルース風味の弱進行



目的

ビートルズの『Love Me Do』や『Hey Jude』と同じコード進行の機能分析を通して、GフォームとB♭フォームのスリー・コードを覚えると同時に、ビートルズの名曲にも頻繁に使われているブルース風味の弱進行を学びます。

POINT

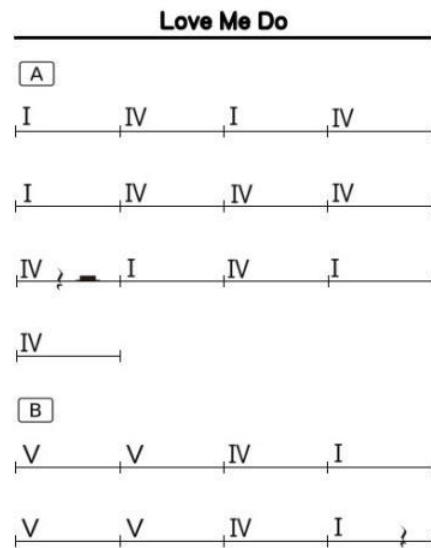
- ブルース風味の弱進行
- Gフォームのスリー・コード

ビートルズの『Love Me Do』(1962)や『Hey Jude』(1968)と同じコード進行をGフォームとB♭フォームのスリー・コードで機能分析していきます。

『Love Me Do』はビートルズのデビュー・シングルで、スリー・コードで作られたシンプルな楽曲でありながら、「処女作はその存在が表現する主題をモノ語る」という法則どおり、その後の活躍を暗示するような作品になっていました。

とりわけBメロに登場する「5 4 1」というコード進行は、『Hey Jude』をはじめとする様々な楽曲で印象的に使われ、ビートルズを象徴する進行となっているものです。

この5 4 1進行をモノにできれば、ビートルズ級の楽曲を作れるようになるかもしれません。



Comment

【キーとコード】

今回の『Love Me Do』の機能分析は、原曲どおりのGフォームのダイアトニック・コードを使って進めていきます。3カポのEフォームや5カポのDフォームでも弾けます。

【『Love Me Do』の機能分析で使うキー】

【Love Me Do】

Key in G

Play E (Capo3)

Play D (Capo5)

『Love Me Do』はスリー・コードで弾ける曲です。Gキーのダイアトニック・コードとスリー・コ

ードを確認しておきましょう。

■ Gキーのダイアトニック・コードとスリー・コード

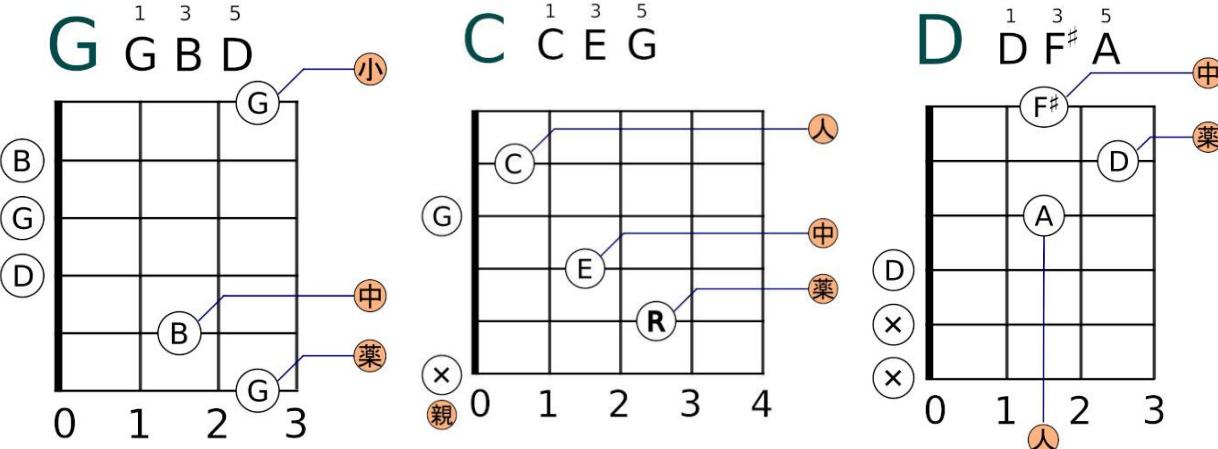
I II_m III_m IV V VI_m VII_{dim}

G Am Bm C D Em F[#]dim

Gフォームのスリーコード(主要三和音)

I IV V
G C D

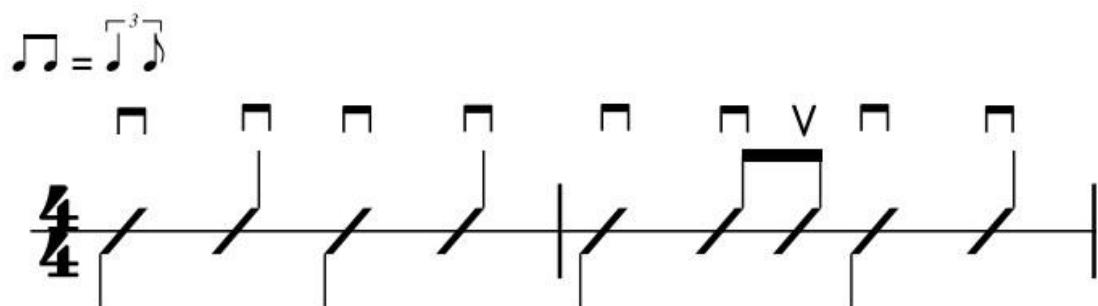
Gフォームの場合、トニックのIはG、サブドミナントのIVはC、ドミナントのVはDです。



ストローク・パターンはこんな感じになります。シャッフルのリズムです。

一拍目と三拍目でコードのルート音を弾いてからストロークすると、それっぽく聞こえます。

■ 『Love Me Do』のストローク・パターン(シャッフル・ストローク)

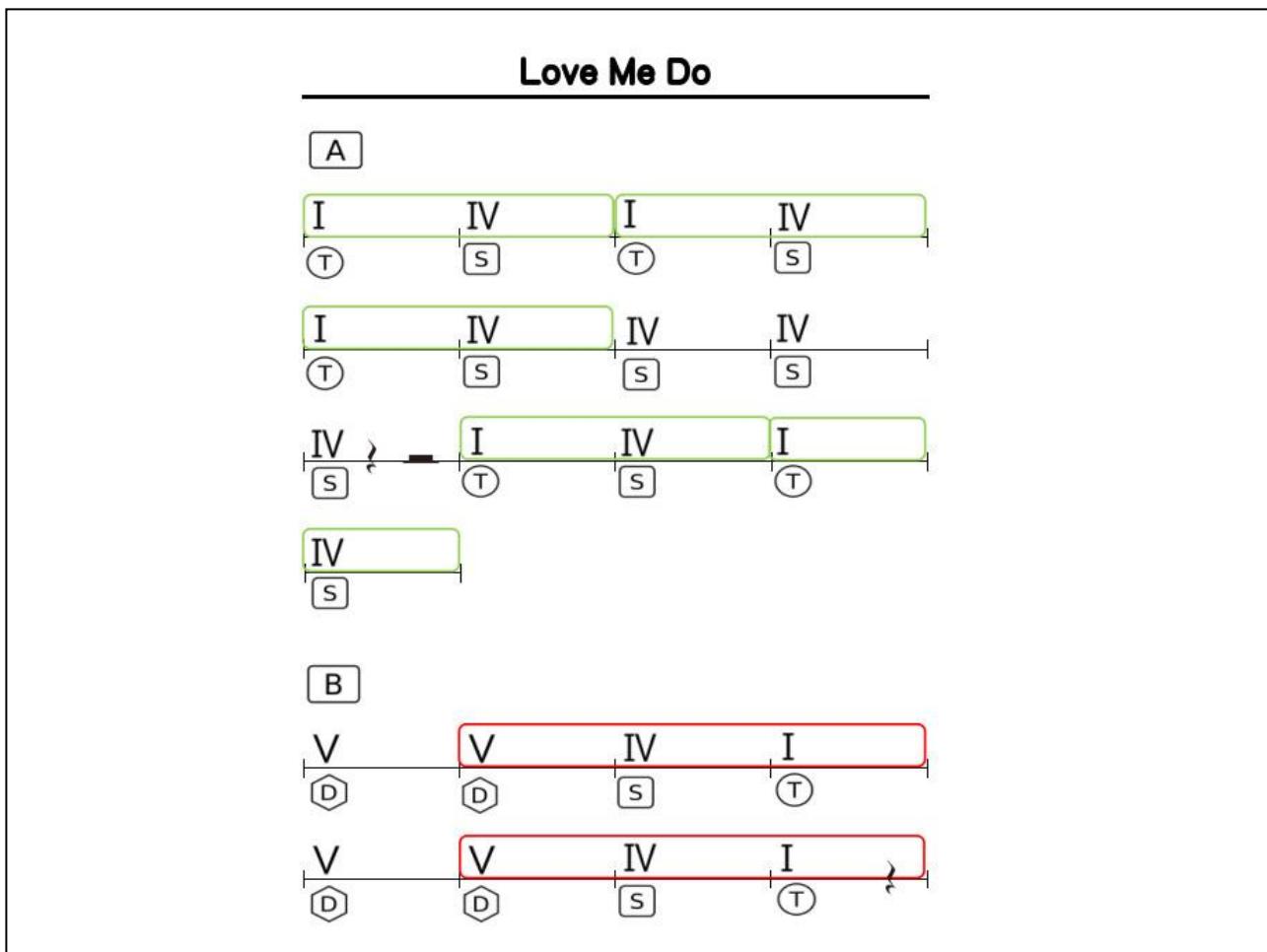


Comment

【コード進行】

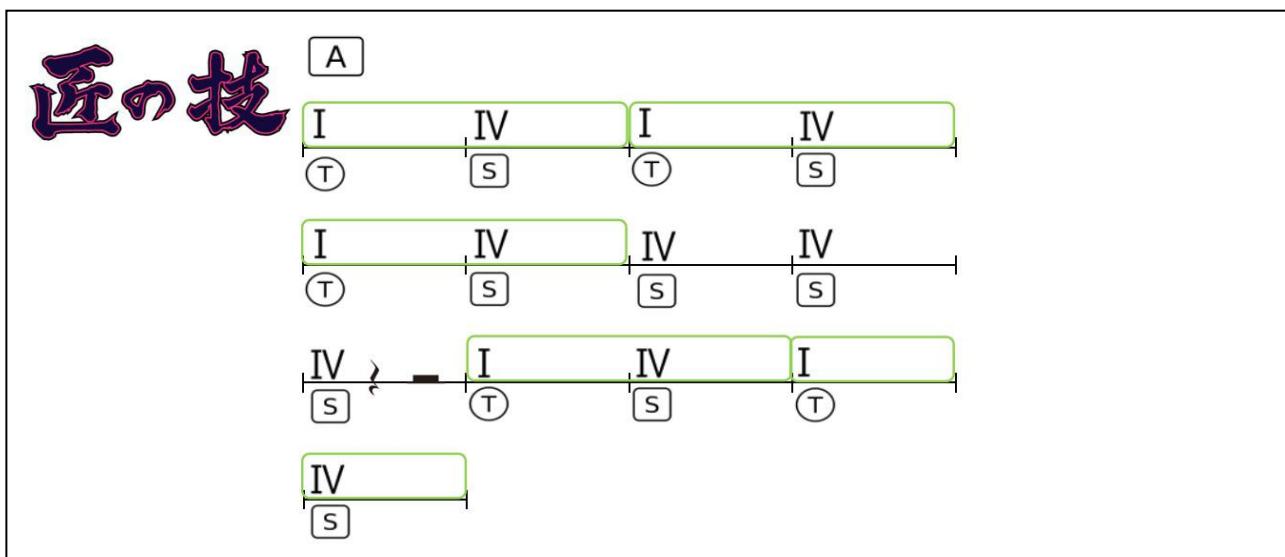
まず最初に『Love Me Do』のコード進行全体を俯瞰(ふかん)しておきましょう。

『Love Me Do』の一本線コード譜



全体を通してトニックのIとサブドミナントのIVとドミナントのVのスリー・コードで構成された楽曲であることがわかります。

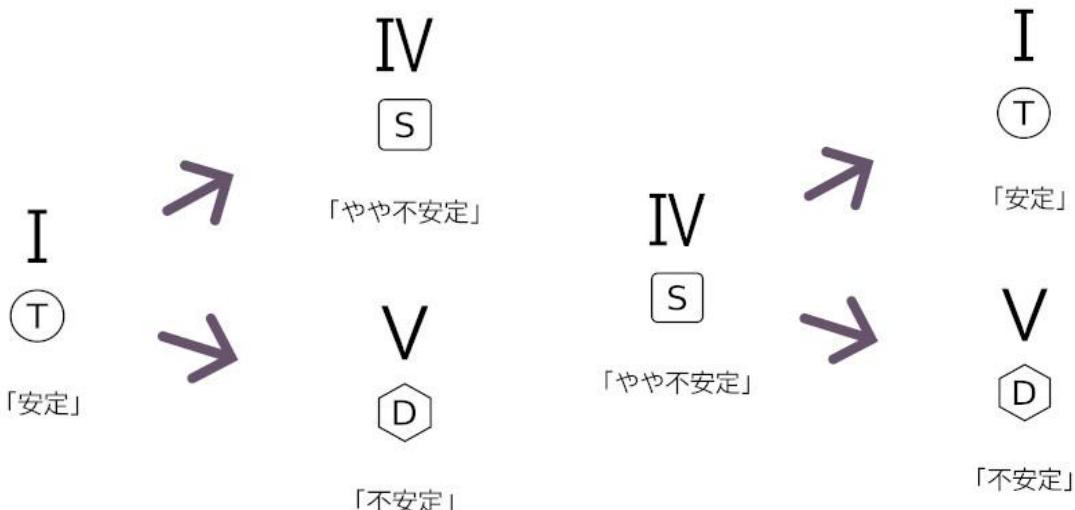
Aメロ



AメロはトニックのIとサブドミナントのIVのみで進行していきます。

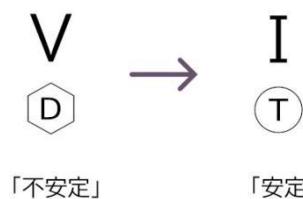
コード進行そのものは「IからIV」と「IVからI」という定番のケーデンスを並べたものですが、Aメロの最後までドミナントのVを登場させないところが“匠の技”と言えます。

定番【トニックの進行方向】 定番【サブドミナントの進行方向】



『Love Me Do』のAメロには、ドミナントのVからトニックのIに解決するドミナント・モーション(5-1進行)が登場しません。そのため明確な安定感が得られないままAメロが終わり、緊張状態を持続しながらBメロになだれ込むことになります。

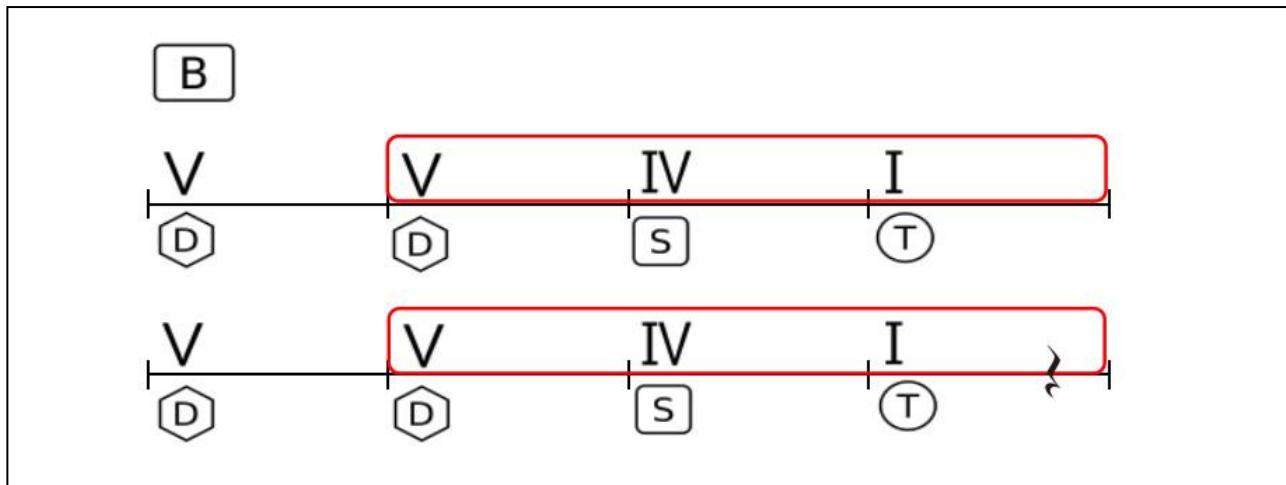
定番【5-1進行(ドミナント・モーション)】



そうするとBメロに入ってドミナント・モーションした時—ドミナントのVからトニックのIに解決した時—の安定感がよりいっそう強く感じられるわけです。

『Love Me Do』のAメロからは、こうした“焦らし”的テクニックを学んでおきましょう。

Bメロ



『Love Me Do』のBメロには、ドミナントのVからサブドミナントのIVへと進む“ブルース風味の弱進行”とサブドミナントのIVからトニックのIに進む“アーメン終止”を組み合わせた541進行が登場します。

定番【ブルース風味の弱進行 + アーメン終止】



不安定なドミナントのVはトニックのIに進んで安定しようとする性質を持ちますが、その性質に抗って、やや不安定なサブドミナントのIVに進んでいくことを“弱進行”と呼びます。この弱進行に続いてIV→Iの“アーメン終止”で終わる541進行は、ブルースのサビとなる部分で頻繁に登場する進行なのですが、この“ブルース風味の弱進行”が既存の価値観に対抗するロックを象徴する進行となり、ビートルズの楽曲でも数多く使われました。

ブルース風味の弱進行

Hey Jude

C I II_m III_m IV V VI_m VII_{dim}
F G_m A_m B^b C D_m E_{dim}

面白い一例を挙げるとするなら、『 Hey Jude 』(1968)のCメロに相当するリフレインでしょうか。

F → E^b → B^b → F

このリフレイン部分のコード進行は「F→E^b→B^b→F」ですが、この曲の主調となるキーはFなので、2小節目のE^bはVII^bにあたり、Fのダイアトニック・コード群にはないノンダイアトニック・コードということになります。

I II_m III_m IV V VI_m VII_{dim}
F G_m A_m B^b C D_m E_{dim}

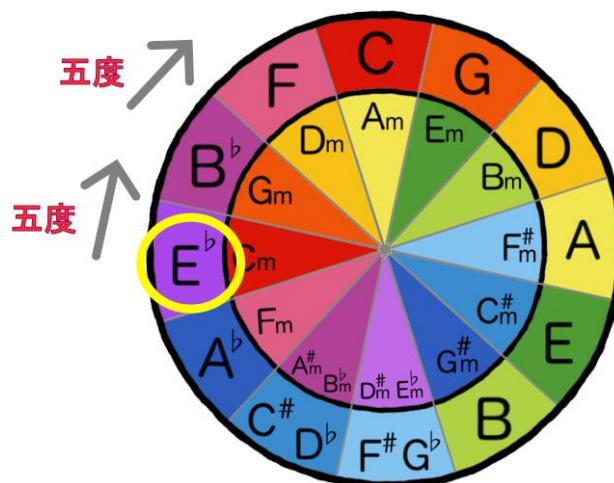
E^b はFのダイアトニック・コードには含まれない

このE^b(VII^b)はどこから来たのかと言いますと、B^bのダイアトニック・コード群のIVを借りてきたものと考えることができます。

I II_m III_m IV V VI_m VII_{dim}
B^b C_m D_m E^b F G_m A_{dim}



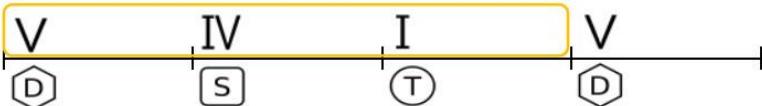
つまりこのFからE^bに進む進行は、2小節目でB^bに調性が変わると考えられるわけです。そこから「E^b→B^b」、続いて「B^b→F」という五度上行を繰り返して、何事もなかったかのようにFキーに戻ってくる少々強引な進行になっているのです。



このような五度上行は“逆5度進行”と呼ばれ、トニックやサブドミナントやドミナントが本来的に進みたがる方向を無視できるほど強い推進力を持っています。そのため『Hey Jude』のリフレイン部のような力技が可能になるわけです。

Hey Jude

C I II_m III_m IV V VI_m VII_{dim}
B^b C_m D_m E^b F G_m A_{dim}



匠の技【B_bにおけるブルース風味の弱進行】



さらに『Hey Jude』のリフレイン部分全体がB_bに転調していると考えると、「F→E_b→B_b→F」というコード進行は5 4 1 5となりますから、その中に「5 4 1進行」—すなわち“ブルース風味の弱進行”—が潜んでいることが分かります。

つまり「F→E_b→B_b→F」というコード進行は、B_bのスリー・コード—IのB_b・IVのE_b・VのF—を「5 4 1 5」の順番で繰り返しているとも考えられるわけです。

I II_m III_m IV V VI_m VII_{dim}
B^b C_m D_m E^b F G_m A_{dim}

B_bフォームのスリーコード(主要三和音)

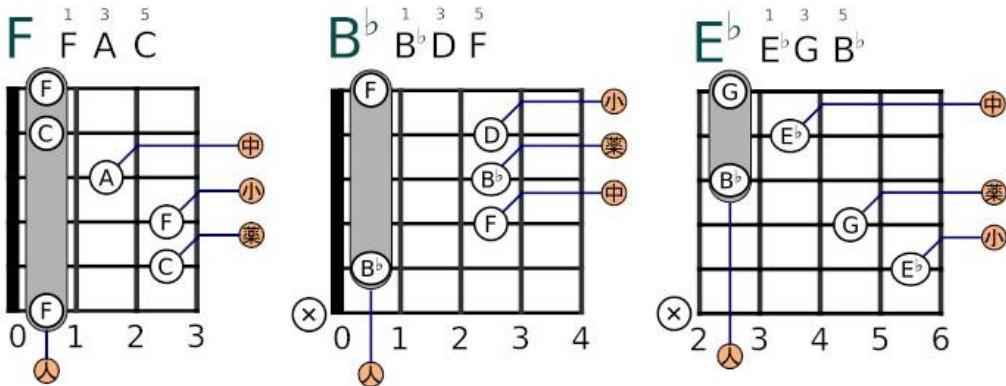
I IV V
B^b E^b F

このように、定番と言われているコード進行(この場合は5 4 1進行)でも、主たるキー(この場合はF)とは異なるキー(この場合はB_b)で使用することにより、新鮮な印象を与えることがあります。

こうした発想は、理論的に仕組みを理解できっていても、頭で考えながらひねり出すことはなかなか難しいものです。そこで「手クセとして身についているコード・フォームを弾いていたら自然にこうなった」という感じでカタチするのが現実的かもしれません。

■ フラット系の省略フォーム

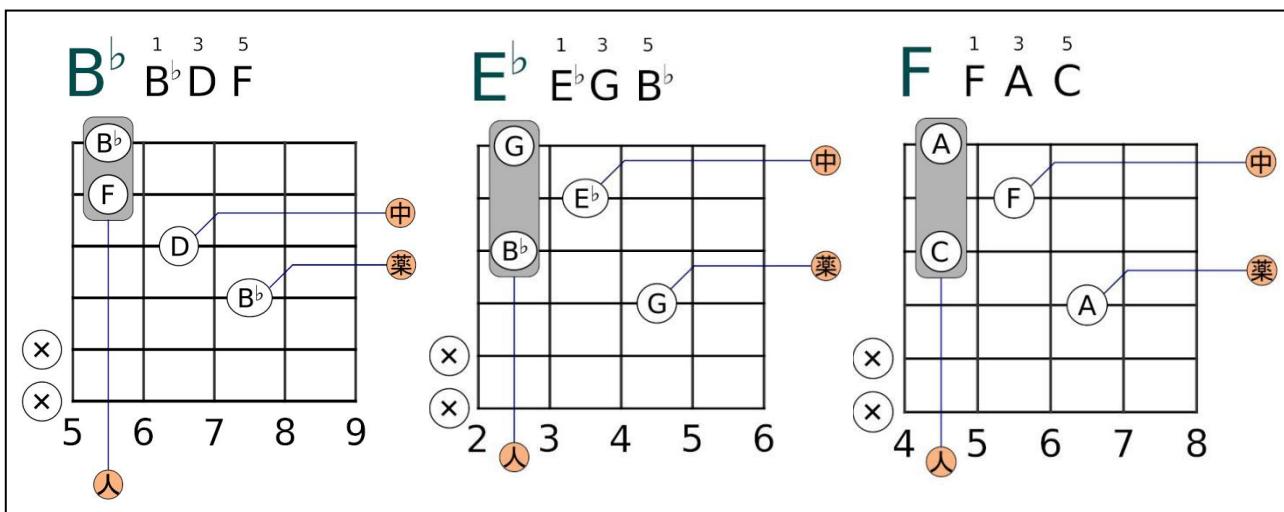
【 \flat 系の三大難関コード 】



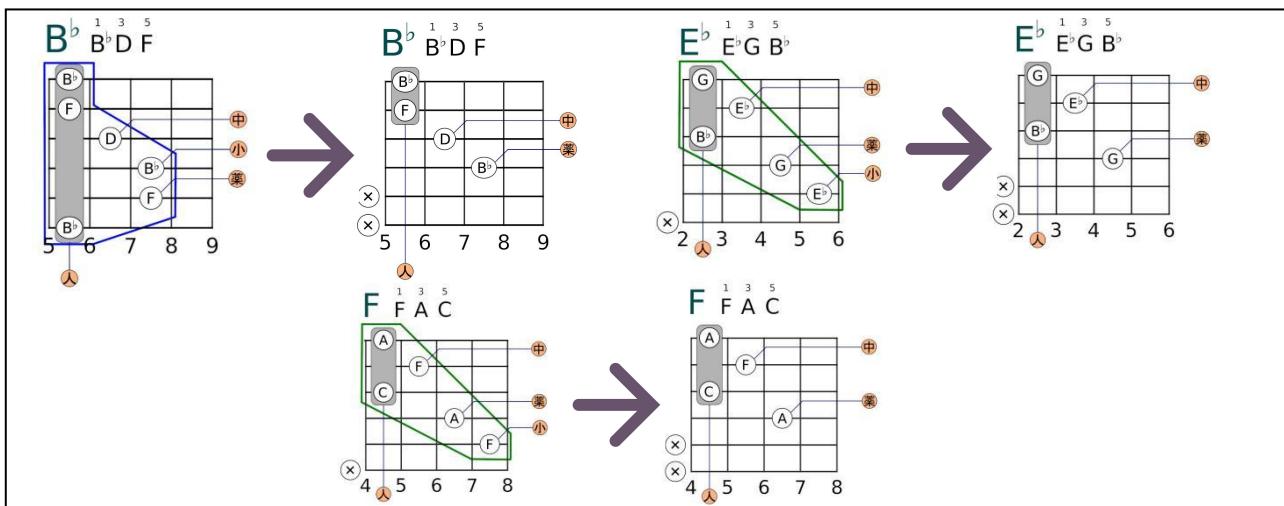
『 Hey Jude 』 のリフレイン部分で登場する $B\flat$ ・ $E\flat$ ・ F のローコードは、どれも押さえるのにひと苦労する難関フォームですから、一般的には敬遠されがちです。

しかし、いつまでもフラット系のコードを弾けないままだと、『 Hey Jude 』 のリフレイン部のようなメロディーラインを思いついてもカタチにできないということになりかねません。

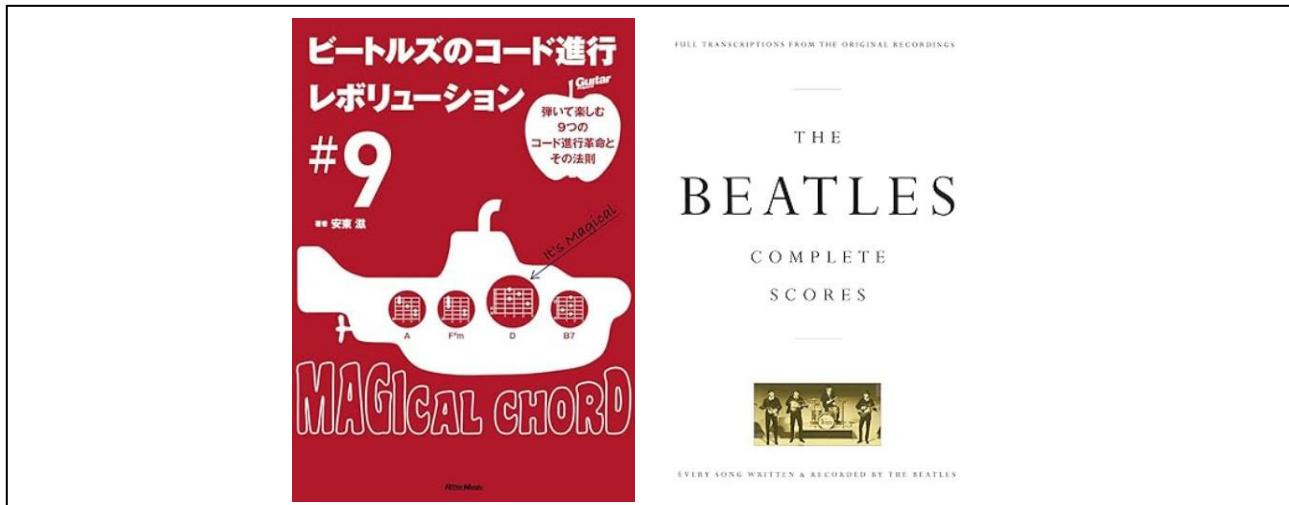
そこで「比較的押さえやすい省略フォームを覚えて手クセにしておこう」という提案をしてみたいとも思います。



これらの省略フォームを使えば $B\flat$ ・ $E\flat$ ・ F も簡単に押さえられるはずです。薬指をガイドフィンガーにして四弦に固定したまま滑らせると弾きやすいくらいです。



これらは、いずれも CAGED システムの C 型と E 型の省略フォームになっていて、B♭ は E 型 B♭ の省略フォーム、E♭ と F は C 型 E♭ と C 型 F の省略フォームになっています。



今回のようにビートルズの楽曲のコード進行を分析をする意義は、楽曲のどこかに耳を奪われるようなフックが必ず盛り込まれていることにあるのではないでしょうか。コード進行やコード・フォームをちょっとぴり工夫するだけで楽曲が色鮮やかに変身するのです。

安東滋さんの『ビートルズのコード進行レボリューション』という本は、その手法を研究するための最適なガイドになってくれました。ビートルズの楽曲を研究するのであれば、全曲を収載したスコアブックもあったりするので参考文献には困らないのがいいところであります。